

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02114

研究課題名(和文) 浮気・不倫の体験談の言説分析

研究課題名(英文) Discourse analysis of marital infidelity

研究代表者

松木 洋人 (Matsuki, Hiroto)

大阪公立大学・大学院生活科学研究科・教授

研究者番号：70434339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本社会における有配偶者の婚外性愛に関する言説の社会的な研究である。2010年代に雑誌に掲載された婚外性愛についての記事を収集するとともに、結婚生活における愛情のありかたについて有配偶者に対するインタビュー調査を実施した。また、収集済みの資料の分析にもとづく査読付きの研究ノートを学会誌に発表して、配偶者がいるにもかかわらずそれ以外の者と性愛を伴う関係をもっているという相談・回答が新聞紙上でどのようになされるのかを検討して、結婚と性愛を結びつける規範からの逸脱である自分の婚外での性愛についての相談とその回答の理解可能性が当の規範によって支えられていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

婚外性愛は日本の家族の変化や現在地について考えるうえで非常に重要な研究テーマである。これまでの社会学研究においては、従来の日本の結婚では特に男性の婚外性愛が問題化されにくかったという議論や近年になって結婚と性愛が切り離されるようになりつつあるといった議論が提起され、そこに日本の家族の特徴や変化が読み込まれていた。しかし、本研究は人々が結婚と性愛を結びつける論理の実際の使用に目を向けることによって、これらの議論の精緻化を図ろうとするものである。このことは日本の家族の特徴や変化をより精緻に理解することにもつながりうるという意味で一定の学術的・社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)： This research is a sociological study of the discourse on marital infidelity in Japanese society.

I collected articles about marital infidelity published in magazines in the 2010s, and conducted an interview with married couples regarding the affection in married life.

In addition, I have published peer-reviewed research note in academic journals based on the analysis of previously collected materials. This research note analyzed consultations and answers in newspapers article about people who are married but have sexual relationships with people other than their spouses. By examining how this is done, I found out how intelligibility of these consultations and responses has been supported by the norm that link marriage and sexuality.

研究分野：家族社会学

キーワード：家族社会学 ロマンティック・ラブ・イデオロギー

1. 研究開始当初の背景

2010年代後半に入ってから、マスメディアで有名人の不倫についての報道が繰り返されたことは記憶に新しいが、既婚者が配偶者以外の者と性愛関係を持つという出来事は、多くの人々の関心の的であり続けてきた。歴史を遡れば、既婚男性が婚外で女性と性愛関係を持つことは、日本近代の黎明期から、日本社会の「後進性」を示すものとして、繰り返し知識人による批判の対象とされてきた。また、夫や妻の浮気は有配偶者の定番の悩みの1つであり続けており、配偶者が自分以外の誰かと性愛を伴う関係を持つということは、人々にとってしばしば重大な問題となる。さらに、1980年代以降、TVドラマの放送をきっかけに、雑誌記事では不倫が頻繁に取り上げられるようになり、ルポルタージュ形式の書籍も数多く刊行されるようになって、現在に至っている。しかし、婚外の性愛関係がこのように人々の社会的関心の高い主題であり続けているにもかかわらず、文学研究や心理学的なカウンセリングの対象とされたり、自然科学的観点からの啓蒙書の主題となったりすることはあっても、研究開始当初におうては、本格的な社会学研究の主題となることは特に日本ではほぼなかったといつてよい。

2. 研究の目的

以下のような背景をふまえて、本研究では、特に不倫についてのメディア報道が過熱していた2010年代から現在に注目して、雑誌記事を中心に既婚者の婚外性愛に関する体験談を収集したうえで社会的な分析を行った。それらの体験談において、愛と性と結婚という3つの要素がどのように規範的に結合したり分離したりしているのかに注目することによって、日本社会において、既婚者が婚姻の外部で性愛を伴う関係を持つことが、どのような論理を通じて、いかなる意味を与えられてきたのか、そして、それらの論理や意味がどのような現代の特徴をもっているのかを明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

本研究は、2010年代から現代に至るまでの日本社会における既婚者の婚外性愛についての体験談を収集して、そこで使用されている論理を析出するという方法を採用している。大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 Web 版を活用して、雑誌記事のうち既婚者の婚外性愛に関するものを収集した。また、補助的なデータとして、有配偶者にとっての結婚生活における性愛の位置づけを主題とした探索的なインタビュー調査を行い、結婚と性愛を結びつける論理の使用のされかたが観察可能な語りのデータを収集した。

4. 研究成果

(1)本研究に関連する成果としては、まず、研究期間内に学会誌に掲載された研究ノートがある(松木洋人,2020,「自分の婚外性愛についての相談/回答はどのように成し遂げられるのか:新聞紙上の人生相談記事を題材とした探索的考察」『家族研究年報』45:79-96)。この研究ノートは新聞記事における人生相談のうち、配偶者がいるにもかかわらずそれ以外の者と性愛を伴う関係をもっているという相談やそれに対する回答がどのようになされるのかを検討したものである。データ自体は本研究の実施期間以前に収集されたものであるが、まさに有配偶者の婚外性愛とそれに対する反応がどのような論理のもとで成立しているのかを分析した研究成果である。その具体的な知見は以下の通りである。相談者は自身を非難したり、自らの感情やふるまいを自由意志を欠くものとして記述したり、「正しさ」を欠いた結婚生活に替えて、より「正しい」結婚生活を始めることができないという「道徳的な悩み」を語ったりすることで、悩みの相談を相談とそれに応じた助言に値するものとして編成する。回答においては、ほとんどの場合、婚外での関係の解消と新しい結婚生活のいずれが是とされるかは二者択一で、婚外での関係と現在の結婚生活の「両立」を認める回答は数のうえで例外的であるのみならず、回答者によって例外として構成されたりもする。これらの意味で、結婚と性愛を結びつける規範からの逸脱である自分の婚外での性愛についての相談とその回答は、その理解可能性を当の規範によって支えられている。

(2)第2に、本研究期間に収集した資料の分析にもとづく成果については、期間内に刊行することができなかったが、現在、日本社会の夫婦関係における親密性を主題とする共編著の出版を企画しており、そのなかでこれらの資料を分析した成果を発表する予定である。分析はまだそのごく初期段階にとどまっているが、現時点における大まかな見通しは以下の通りである。そもそも婚外性愛をめぐる言説においては、性愛の結婚への包摂が日本の近代化や戦後の民主化にとっての課題となっていたころから、性愛を結婚に包摂する論理と分離する論理との綱引きが生じている。戦後、この封建的家族制度と近代的結婚の綱引きが続くなかで、現在では後者がかなり優勢になっているが、その一方で、特に1980年代以降、性愛を結婚に包摂する論理は、妻を含めた既婚者の性愛の自由とも綱引きをするようになり、やや比喩的にいえば、「近代」が「前近代」と「脱近代」に挟み撃ちされるようになる。2010年代における婚外性愛の体験談を支える

論理もその延長線上で理解することができ、一方では「不倫」への批判が激化すると同時に、結婚を形骸化した形式と捉えたり、結婚と恋愛を切り離して後者に高い価値を置くことによって、「不倫」への批判に対する反省が高まる。つまるところ、有配偶者の婚外性愛に対する批判と批判の相対化が同居しているのが現在の日本社会なのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木戸 功, 戸江 哲理, 松木 洋人	4. 巻 28
2. 論文標題 全国家族調査における質的調査のとりくみ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『社会と調査』	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松木 洋人	4. 巻 45
2. 論文標題 自分の婚外性愛についての相談 / 回答はどのように成し遂げられるのか：新聞紙上の人生相談記事を題材とした探索的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族研究年報	6. 最初と最後の頁 79-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松木洋人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 390
3. 書名 二宮周平・風間孝編 『家族の変容と法制度の再構築：ジェンダー/セクシュアリティ/子どもの視点から』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------